広島国際学院広報

広島国際学院大学・広島国際学院大学自動車短期大学部・広島国際学院高等学校

発行者：学校法人 広島国際学院　〒739-0321　広島市安芸区中野６丁目20-1　☎(082)820-2345

―第73回日本社会学会大会を終えて
成し遂げたよろこび―

目　　次

「自己組織」のエネルギーを …… 1
現代社会学部設立記念講演 …… 2
第73回日本社会学会大会終る …… 2
現代社会学部公開市民講座 …… 3
ロシアと日本のかけ橋として働きたい … 4
第33回高城祭(大学祭)…… 5
私の大学生活 …… 5
卒業生職場でがんばる…… 6
自己をアピールする力をつける
(工学部)…… 7
学生パワーに絶賛の声
(現代社会学部)…… 8
学び、創り、挑む、楽しいゼミ
(自動車短期大学部)…… 9
高校から発信 ……10
研究室紹介 ……11
大学院生が国際学会で頑張る…… 12
イギリスでデビュー作を出版
ミッチェル講師…… 12

「自己組織」のエネルギーを

現代社会学部長　新睦人（あたらしむつんど）

この数年、「世界標準」とか「国際標準」という言葉をよく耳にする。たとえば、国家が「護送船団」として企業を後押しをしたり企業の失敗のつけを払うような、「日本標準」に対して、この基準は一種の他律的な抑止的「外圧」効果をもっていて、自分で自分の欠陥を見いだせない、変革する勇気のない社会や組織にとっては、国際化という大義名分のもとに、応急の特効薬のような働きをしている。けれども、そのような社会の仕組みが否応なく変化して適応を遂げていかなければならないような時に、その社会や組織が、自らの意志や力や知恵によらないで、外部にある他の社会や組織の圧力によって他律的に変化するということは、それが本当に変化すべき状況にあるかぎり、その社会や組織の在り方にとっても望ましいことではない。

「自己組織」という性質を私たち社会科学者は社会のさまざまなシステムが内蔵している、複雑系としての決定的な性質であると考えている。とくに、人間の社会には、先天的なDNA情報のプログラムだけではなくて、人間言語による後天的なプログラムによって変化するという特徴があるから、この能力によって自己の内側から主体的に自己の在り方を選択していくことが人間社会の最も重要なシステム特性ということになる。いま、日本の大学は、国立大学も私立大学もともに大きな変動の渦中にある。この変動は、「勝ち残り」を賭けた、自律的で個性的な革新でなければならない。そのうちどうにかなるだろうとか、誰かがやるだろうではなくて、自らの意志で、自らの知恵で、自らの責任で変革を実現しなければならない。私たちの大学も、まさに真の意味での「自己組織のエネルギー」があるかどうかが問われている。

現代社会学部設立記念
2000年公開記念講演

西澤（にしざわ）　潤一（じゅんいち）先生

「世界の創造力・日本の創造力」

現代社会学部では、学部の教育と研究の実情を市民の皆さんに紹介させていただくために、年に２シリーズの市民公開講座を開催しているが、この現代社会学部がスタートしたことを記念する2000年講演会を、９月29日(金)午後６時より、広島国際会議場で催した。

講師としてご来広いただいたのは、光ファイバーの開発者としてよく知られている西澤潤一先生である。西澤先生は、これまでにも日本学士院賞（昭和49年）や文化勲章（平成元年）の他に、本田賞（昭和61年）、ＩＯＣＧローディス賞（平成元年）などを受賞され、ロシア科学アカデミー会員やポーランド科学アカデミー外国人会員など、諸外国の学術研究の領域でも広く認められた著名な研究者であることはいうまでもないが、先生は、東北大学総長（平成２～８年）を歴任後、目下、岩手県立大学学長としてもユニークな教育を率先して実施中である。また、最近では世界的に権威のある「エジソン・メダル」2000年の受賞者である。一方、先生は、日本の教育についてかねてより深い危惧をいだいておられ、その思いは近著の『新学問のすすめ』（平成８年）、『背筋を伸ばせ日本人』（平成９年）、『教育亡国を救う』（平成12年）などで主張されている。

講演ステージ

講演では、イギリスの産業革命を導いた発明の基盤が何であったか、またそれがどのようにして新しい技術に結びついていったかといった、世界の技術革新が創造的な成果を生みだしてきた文化の特性と、日本の社会と文化が技術革新を支えていく力との根底的な差異について多くの反省点が示された。先生のエジソン賞の受賞も、本来ならばもっと早く実現していたと思われるが、それを今日まで延期させたのも、日本の社会に巣くっている技術的な創造への無関心や創造や革新への努力や芽生えを軽視する文化的な伝統であったということが分かる。人間の創造力は偶然的な出来事によって生まれるものではなく、教育領域をも含めて、創造的な営みに価値を認める文化の底辺の広さの賜物である。まして、それは、官僚的な発想に適合するような、記憶型の学習から成り立つものではない。その意味でも、西澤先生のような創造的実践者の警告は重要である。

受　付

第73回

日本社会学会大会終る

21世紀社会学のアイデンティティを求めて

去る11月11日（土）と12日（日）の両日、（法）広島国際学院、広島国際学院大学、同自動車短期大学部の協力を得て、第73回日本社会学会大会が開催されました。約1200名の参加者があり、2000年大会にふさわしい盛大な大会になりました。自由報告数は、336件とこれまでの最大数でした。

12日には、シンポジウム「21世紀社会学のアイデンティティを求めて」をテーマとする二つのシンポジウムが開かれましたが、いずれも満席で活発な議論が交わされました。広島で開かれる24年ぶりの大会でしたが、大成功のうちに終了しました。

11日の夜にはホテル・グランヴィアで懇親会が催され、学院からは西本五郎理事長、鶴　素直総長、紀　隆雄学長のご臨席をいただき、理事長から歓迎の挨拶をいただきました。ご支援下さった皆様に心よりお礼申し上げます。

なお、広島国際学院大学現代社会学部　新　睦人学部長は、今期で本学会の常任理事の任期を満了されました。改選により広島国際学院大学現代社会学部　好井　裕明助教授が理事に選ばれました。

第73回日本社会学会大会実行委員長
磯部卓三

討議に熱が入る

文化の比較でみる世界と日本の社会

～～～秋のシリーズを開く～～～～～

現代社会学部公開市民講座第2回

◈テーマと趣旨

2000年秋季の公開講座は、見出しのテーマで開催された。国際化やグローバリゼーションが説かれる昨今、長引く不況の一方では、海外への観光団体旅行が引きも切らない有様である。日常の生活用品に外国産をみること久しく、もじどおり世界は狭くなっている。しかし、訪問した国々や国内の各地でみかける外国の人々との会話とか交流の機会は、ほとんどないに等しい。間もなく21世紀を迎える今日、多くの国の多様な文化を知ることで、自国の理解を深める必要性はいよいよ高まっている。

◈講師と題名

学外から一橋大学の町村教授を招へいし、次の様な構成で講座が用意された。

中野秀一郎	多民族・多文化社会カナダ
定松　　文	言語の創造　―コルシカ語はいかにして言語になったか―
町村　敬志	ロサンゼルスの越境社会
目黒　輝美	イギリスとスウェーデンにおける障害者福祉
伊藤　泰郎	日本における中国系ニューカマーの生活世界

講師の皆さんは、十分な準備と多くの配布資料を用意して講演されている。どのテーマも、現地での長期滞在やフィールド調査による多年の研究蓄積をもって説明しているから、大方の聴講市民はカナダ、フランス、アメリカ、イギリス、スウェーデンそして中国について知見を広め、新しい見方を学びとったと考えられる。市民から寄せられたコメントに具体的な感想がいろいろ書かれているからである。

◈聴講市民の反響

まれに、評論家風の非常にきびしい論断もあったが、感想を寄せた市民の大方は、中に不満点を記すむきもあるものの、外交辞令は別にしても、感銘と好評の文言を多数表明されている。真摯で誠実な解説と説得的な主張に接して、各国の理解に大変有益であったという方が少なくないからである。たとえば、民族紛争の把握の上で、歴史的事件の解明で、ライフスタイルの再考に、ボランティア活動の活力を与えられたり、身近な福祉問題に一段と興味を深める、などである。また、若い日の回顧の機会となってなつかしみ、子どもとの話題を得て喜ぶ方、新しい学習のきっかけを見い出すことにもなった人、心に残るものを感得したとの言葉をみることもできる。帰り際に、「立派な先生方をお揃えですね」、と耳打ちされた紳士もおられる。

講座の運営には、担当部局の多くの方々のご尽力を得ていることを明記しておく。

ロシアと日本のかけ橋として働きたい

広島国際学院高等学校
1993年度卒業
在カザフスタン日本国大使館元派遣員　岡本（おかもと）　貴充（たかみつ）

ロシア語との出会い

私は７年前の93年に広島国際学院高等学校を卒業後、九州産業大学経営学部国際経営学科に入学した。入学直後の４月に博多港でカムチャッカ半島から来たロシア人達と偶然に出会い、彼らの話すロシア語の響きに感激してロシア語を勉強するようになった。当時、博多港にはカムチャッカからの冷凍船やウラジオストックからの観光船がほぼ毎日停泊し、港はロシア人で溢れかえっていた。大学の講義のない時間は、いつもペンと手帳と辞典を携帯して自転車で博多港に行き、夜中までロシア人と話をしたり、通訳をしたりした。会話の中で、新しく出会った単語などはすべてノートに書いてもらうなどした。港では、親切なロシア人から生きたロシア語を毎日学び、家ではラジオ講座からロシア語の文法を学ぶというロシア語漬けの生活が続いた。

もちろん勉強しはじめの頃は、ロシア語自体理解することが出来なかった。しかし、ロシア人の人柄と、彼らと会って話すことが何よりも好きだった。大学の寮から博多港までの往復10kmの道のりを毎日自転車で通うことなど苦にはならなかった。私のロシア語の会話力も飛躍的に伸び、彼らの話すロシア語が理解できるようになり、大きな喜びを感じた。９ヶ月後には、福岡の貿易商の通訳として一週間、ウラジオストックでの海外生活を経験することになった。貿易商のビジネスの通訳をするうちに、ロシア留学を具体的に考え始めた。そうして大学２年次終了後、１年間休学しウラジオストック極東大学へロシア留学をした。留学中は、少しでも多くのロシア語書籍を読むことに専念した。留学後、外務省在外公館派遣員選抜試験をロシア語で受験し合格する。97年３月からの２年間、在カザフスタン日本国大使館で大使館員として勤務をすることになった。こうしたロシアでの３年間の生活は、語学力を高めたことはもちろんであるが、現地の人やいろいろな国の人たちとの出会いによって多くのことを学び、自分を磨くという貴重な体験であった。

カザフスタンで感じたこと

カザフスタン大使館での私の仕事は、大使館・大使公邸を維持運営していくこと、現地職員管理の補助的事務、ロシア語の通訳などであった。さらには、日本から来る大使館の来客をサポート（便宜供与）するという仕事もあった。日本国政府を代表して直接カザフスタン政府と交渉するということはなかったが、大型ミッション（小渕総理・経団連会長一行）が、カザフスタン訪問されたときは、宿泊ホテルの確保、レセプション会場の手配、配車手配などミッションで代表として携わった思い出の仕事であった。

現地の人たちと一緒に仕事をすることが多く、その中で次のようなことを感じた。

第一点は、相手の立場に立った思いやりのある話し方が大切だということである。日本語でも同じことが言えるが、丁寧に思いやりをもって話すと、その言葉にはその人の人間性があらわれ相手に理解される。話す人間の話し方次第で相手は好意的にも非好意的にも理解する。このちょっとした努力で人間関係が良い方に築かれていくことを知った。

第二点目は、ロシアでの駐在ではあるが、英語力が必要だということである。仕事の関係でドイツに出張する機会が多かったが、カザフスタンを出国した瞬間から情報はすべて英語であり、世界の共通語は英語であることを痛感させられた。いろいろな情報を得るにしても英語での情報量は日本語のそれとは比較にならない。情報面（新聞）を例にとっても、日本で報道されることと、ロシアで報道されることは、いつも同じとは限らない。例えば、同じ北方領土問題にしても、日本人・ロシア人・アメリカ人の見解はそれぞれ異なる。そして、自分の見解を持つことから始まり、相手の立場を考慮し、相手の意見を聞き、広い見地から考えることは非常に大切である。主な国際問題などは、すべて英語でなされている。

ロシアとのかけ橋として

大学を卒業後、さらにロシア文学を研究するため、早稲田大学文学部ロシア文学科に学士入学し、現在に至っている。

これからは、ロシア語を更に修得するとともに、英語力を身につけ、将来は日本とロシアのかけ橋として活躍できることを念じている。

絆って何んだろう
盛りあがる強大なパワー

燃え上がるファイアー

アーチェリーゲーム

市内パレード

第33回高城祭 絆

文化の香り

食は絆を深める

第33回高城（大学）祭が11月18日(土)・19日(日)に中野キャンパスで行われた。実行委員会ではこれに先立ち、10月17日(火)に広島市本通り周辺で、市内パレード（仮装行列）を行った。また、大学内外の清掃活動を11月10日(金)に行い、地域住民に感謝し、祭りをアピールするとともに、バザー券を配布し住民の参加を呼びかけた。

祭り当日には文化展やバザー店が開かれ、周辺大学生、高校生、地域住民の多数の参加で盛りあがった。中でも、前夜祭（18日）のビンゴゲームでは海外旅行（ペアーで22万円相当）を射止めた参加者もあり歓喜があがった。当夜祭（19日）には「ゼリー」を迎えたゲストライブが行われ、寒さを忘れさせる程の活気あふれる祭りとなった。

（高城祭実行委員会）

私の大学生活

現代社会学部２年生
岡（おか）　奈津子（なつこ）

昔から機械に興味があったので、この大学で共通基礎科目としてコンピュータの授業を受けている時がとても楽しいです。授業を重ねていく度にコンピュータの本質を正しく理解する事が出来て、自然に自分でコンピュータを扱える様になれたので大変満足しています。

図書館で

２年生から社会学基礎ゼミナールの授業を選択し、私はヨーロッパについてもっと詳しく知りたかったので定松ゼミを選びました。ここでは自分から進んで学習していき、発表を順番に行って、質問したり・意見を言ったりして深くヨーロッパを知ろうとしています。自分達なりにヨーロッパに住む人々の感覚や考え方を理解し楽しく授業を受けています。概念や用語を知るだけでなく、そこで生活している人がいることを実感できることは、社会学にとって重要なことだそうです。

友との語らい

このゼミは事前に課題が出されるので、予習するのは大変ですが、定松先生はサッパリとした性格でとても親近感が持てます。

また、周りの友達も明るい人ばかりなので、遠慮なく自分の意見がだせるため、課題をみんなでこなしながら毎日楽しく大学生活を送っています。

自分を磨く、チャレンジ

機械工学科平成2年度卒業
板　村　孝　史

私は、平成3年3月に広島国際学院大学機械工学科を卒業し、(株)リョーセンエンジニアズに入社しました。入社後は、技術計算センタ・機械解析課に配属され、主に原子力機器や航空機の解析を担当してきました。

解析業務は、数値を扱う関係上、細かい作業が多く、非常に根気が必要であり、条件の設定を誤るとすべてが水の泡となるためとても神経を使います。また、納期との戦いとなることも多く、時には徹夜で作業を行い、納期を確保するということも珍しくありません。

このように、精神的にも肉体的にも厳しい業務ですが、幸い上司や先輩にも恵まれ、なんとか頑張っています。

今回、私が学生時代にお世話になった、機械工学科から特別講義のお話があり、7月14日(金)に、私の上司と共に、「企業における構造解析の現状と今後の動向について」というテーマで、90分間の特別講義を行いました。その講義の中で私は、航空機・宇宙開発の解析事例として、ヘリコプタ、ロケット、宇宙ステーションについて、体験談を交えながら解析事例を紹介しました。当日は、受講予定者数80名を大きく超える約100名の学生が聴講し、講義開始後1時間ほどはエアコンが効かないほどの熱気でした。今回の特別講義では、学生達に、解析の難しさや、工学的センスの重要性を認識していただけたのではと思っています。

本学で特別講議をする

最後に、先輩として後輩達へ一言、自由な時間のある今、遊びでも勉強でもいろいろなことにチャレンジして自分を磨いて下さい。

卒業生職場でがんばる

情報工学科平成6年度卒業
吉　川　　洋

経験は人を育てる

(有)サン設計に入社し、今年で社会人6年目になりました。そして橋の設計6年生でもあります。土地の交通量や地形から必要な形状を計画し、橋自体の自重や人や車の重量、地震にも耐えうる構造を設計・図面に興すことが私の仕事です。

情報工学科出身の私ではありますが、「早く安く」の時代に産まれた「パソコン」が、土木分野で活路を与えてくれました。今は、電算機で設計を行い、CADで図面を作製しています。

私はどちらかというと受身型で、言われたことを理屈抜きで実行するタイプでした。先生の言うことを聞いていれば良いと思っていたのですが、社会では目標は指示してもらえても、やり方は黙っていては誰も教えてくれません。待っていては何も進みません。

「解らないならどうしたら解るのかを考える。その答えが『人に聞く』ならそれでもかまわない。とにかく仕事を前に進める」

その習慣の無かった私にとって、これは苦痛でした。意識改革に2年はかかったと思います。しかし苦労した甲斐はありました。

経験は人を育てます。私も少しは成長したと自負しています。

今もなお就職は厳しいようですが、それもまた貴重な経験だと思います。

学生のみなさん、何事も実行してみてください。得るものは必ず有ると思います。

頑張ってください。

多忙な毎日

工学部

自己をアピールする力をつける

● 前田裕司教授「クライオスタット」を発明

この度、科学技術庁長官から前田教授に「注目発明選定証」が交付された。

クライオスタットは材料を液体窒素温度（－196℃）のような低温に保持して、測定実験を行う装置である。この開発した装置は原子炉材料の基礎的性質を研究するために、イオンを材料に照射して材料中に生じた格子欠陥をＸ線回折により測定するものである。これらの欠陥は液体窒素温度でも動いて消滅するので、欠陥が動かない非常に低い温度（液体ヘリウム温度、－269℃）で照射を行う必要がある。開発した装置は低温で材料の照射が可能で、照射後、低温に保って材料をＸ線測定装置に移し変えて測定を行うことが出来る。放射光を利用したＸ線測定実験も可能である。この装置は日本原子力研究所の加藤輝雄氏と共同で開発したものである。

● 夏期公務員試験対策講座の開催

公務員志望者増える

中野キャンパス内において、去る９月７日(木)～14日(木)の間、２・３年生を主体に夏期公務員試験対策講座を開催し、112名の学生が熱心に受講した。

この講座は公務員を目指す学生に対し試験の傾向を把握させ、勉学の取組方法を自覚させることを狙に、夏休みの１週間を「基礎講座」とし、春休みの１週間を「応用演習講座」として実施している。

受講生には好評で「公務員試験の実態が把握できた」「勉学への取組方が判った」「科目を増やして欲しい」「実施日を増加して欲しい」などの意見が多くよせられた。

潜在能力を培うために

●情報工学科卒業研究中間発表会を実施

平成12年10月28日（土）、「卒論の中間発表会」が工学部10号館のマルチビジョン教室において行われた。発表研究室数９、発表件数41件、発表人数77人であった。質疑応答、ディスカッションが白熱し、聴衆の３・４年生のなかには座れない学生もおり、予定の時間をはるかに越え終了した。

この発表会は毎年行っているもので、社会に出てすぐに必要とされる「プレゼンテーション」の練習と、来年２月中旬に行われる卒論発表への「動機づけ」を目的としている。

発表の中には「死ぬ気でやれ」とコメントされ、「死なれては困るので死なない程度でやってほしい」と他の教員からの助言があったり、爆笑ムードに包まれていたりした。

発表に熱が入る

●３年生対象の就職保護者懇談会を開く

去る11月18日（土）13:00から中野キャンパスにおいて、３年生の保護者を対象にした就職保護者懇談会を実施、遠くは長野・神奈川をはじめ中・四国に亘る地域から124人の参加があった。

この懇談会は、企業の採用活動及び学生の就職活動の早期化に対応するために、今年度から３年生の保護者を対象に実施することになった。全体説明会に引き続き、電気工学科・電子工学科・機械工学科・情報工学科による学科説明会及び、44の卒業研究室に分かれて担当の先生と個別懇談を実施した。

学生の就職に期待

現代社会学部

学生パワーに絶賛の声！
日本社会学会大会 大成功に終る

＝学生スタッフの活躍に賞賛の声＝

11月11日（土）、12日（日）に法人、大学、短期大学の支援のもとに開催された、第73回日本社会学会大会は、全国から約1,200名の会員諸氏が参加され成功のうちに終了した。

現代社会学部では大会の開催に向けて実行委員会を組織し、４月から大会の準備をしてきた。しかし、どれほど現代社会学部の教職員が入念に準備を重ねても、大会の成功には当日の会場での受付窓口や各教室、控室での対応、廊下や通路の誘導、さらには広島駅や瀬野駅などでの案内といった様々な仕事をこなしてくれる学生スタッフの協力が必要である。幸い、７月と９月の募集を通じて現代社会学部からは約100名、さらに工学部からは11名の諸君が学生スタッフとして応募してくれた。

例年の社会学会大会では、学生スタッフは経験豊富な大学院生を中核に３・４年生を主力メンバーにしているのが通例。ところが、現代社会学部は創設２年目の新しい学部なので２年生が最上級生。当然、本学部の学生諸君には学会大会というものに関する知識やイメージがない。そのため、ガイダンスを主なものだけでも４回ほど実施した。事前に他の学会を視察し、その様子をビデオ撮影したものを上映することや田崎先生による基礎マナー講習、さらには伊藤、定松、田中、村澤先生が作成したマニュアルに基づく入念な説明が行われた。

よろこび、充実感

このように入念な準備をしたという気持ちと幾分の不安を抱えながら大会当日を迎えたが、学生スタッフ諸君はわれわれの予想をはるかに上回る活躍を見せてくれた。会場での受付や教室、通路、控室では丁寧できびきびと対応し、瀬野駅や広島駅、会場屋外では寒空の中、案内・誘導の業務をこなした。

会場・受付

シンポジウム風景

こうした学生スタッフの活躍に対して、大会終了後に行われた現代社会学部学生食堂でのささやかな打ち上げの席上、新睦人学部長、磯部卓三大会実行委員長も学生スタッフ諸君の活躍をたたえられた。また、大会期間中はもとより、学会終了後も多くの学会関係者から賛辞が送られている。なお、学生スタッフとして大会に参加することの誇りと自覚を持ってもらうために、当日はスーツを着用してもらった。そのことも学生スタッフが好印象をもたれた要因かもしれない。普段の彼ら／彼女らの「今どきの服装」と「ふるまい」を見慣れている者からすれば、別人のような変身ぶりにいささか戸惑うほどであったが…　願わくは、こうした「好印象」を普段の授業の場でも見せてもらいたいものであるが…。

ともあれ、今回の学会大会の成功は、学生諸君にとって今後の学生生活を送る上での大きな自信となり、また、大学生活の良き思い出となったことであろう。そして、教職員にとっても、このように大きな潜在力を持っている学生諸君の教育に携わることの自覚と責任を痛感する機会であった。

参加者はスクールバスへ

やった！　やった！

全日本ゼロハンカーレース2000

優　勝（学生部門）

学び、創り、挑む 楽しいゼミ

短期大学部

優勝車「ヒゲ１号」

広島国際学院大学自動車短期大学部

自動車短期大学部では、モノづくり授業の一環としてゼロハンカー（0.05リットルの手づくり車）のゼミナールを昨年から開講した。前半を１年次の後期、後半を２年次の前期に分けたゼミナールだ。

開講当初は20名を超える学生がいたが、多くは前半で終わり、後半の２年次前期には精鋭だけの７名が残った。

うれしい表彰式

スピードを競うレース出場を目指しメンバーは製作に励んだ。８月になってからは、休みを返上してエンジン調整、ボディの補強を重点に最後の仕上げ作業に力を注いだ。

第13回目となる「全日本ゼロハンカーレース」は、2000年８月27日（日）広島県世羅郡の小谷スポーツ公園で開催された。

Ｓ字やヘアピンのコーナーを含む約400mの砂地コースを３周半するスピードレースだ。

学生クラスは20台が参加。５台×４組で予選を行い、各組１位と２位の計８台が決勝に進出する。

本学部チームのヒゲ１号（ヒゲというニックネームの学生からとった）は、予選を２位以下に大差をつけて１位で通過、決勝でもダントツの１位でゴール、初出場初優勝の快挙をなし遂げた。

勝因は、７人のメンバーが心を合わせて、機敏な動きをする頑丈なクルマを完成させたこと、関係者の精一杯の応援が、ドライバーに抜群のテクニックを発揮させたことにあると思う。

力走が続く

高校から発信

参加者で溢れかえる学校見学会
＝オープンキャンパス盛大に開催＝

女子生徒で溢れるキャンパス

去る10月１日（日）、広島国際学院高等学校において今年度の学校見学会を開催した。例年、多数の参加者があるが、今年度は特に多く、1,100名を超える参加者で校内は溢れかえった。特に女子生徒の参加者が６割強と例年に増して多かったのが印象的である。①在校生による高校入試の時の話や高校生活などの紹介発表②卒業生による高校時代の思い出や大学入試等の紹介③留学生による本校での生活等の発表④学校紹介ビデオの鑑賞などを行い、公開講座の見学に入った。

公開講座は、コンピュータやロボット、ＣＮＣ旋盤等の実験や朝鮮語、インターネット、陶芸、英会話等12の選択講座を見学する。

参加者は、吹奏学部の演奏会やその他のクラブ活動も自由に見学し、オープンキャンパスは盛大のうちに終了した。

楽しかった修学旅行＝戸惑いと楽しみの初めての分散型修学旅行＝

超エキゾチック

熱帯とロマンの国
シンガポール・マレーシアの旅

生徒、教員合わせて総勢168名、熱帯の国シンガポール・マレーシアの旅を満喫した。日本の梅雨を思わせる湿気には、いささか閉口したが…。高層ビルが林立する近代的国家シンガポールと、前近代的なものを多く残し、ロマンと野性味あふれるマレーシアはまことに対照的であった。生徒達は、強行日程の疲れも見せず、多くの思い出とたくさんのお土産を一杯持って広島空港に降り立った。

カムサハムニダ！
韓国の旅

日韓の歴史に緊張

広島～ソウル～釜山～慶州～ソウルの行程を４泊５日で巡る生徒数80名の修学旅行である。

独立記念館では日韓の歴史を学び、板門店では南北朝鮮の緊張を肌で感じ、ソウルの空気を自由散策で満喫。サウジアラビアの王子様と同宿などなど。今までとはひと味違った修学旅行であった。

カムサハムニダ！韓国！！

満喫！ダイビング
沖縄の旅

生徒数63名４泊５日の南国沖縄での旅であった。従来の観光型修学旅行からの脱皮のひとつとして考えられた沖縄でのマリンスポーツを中心とした体験学習。海中の珊瑚礁や美しい熱帯魚が自分の目の前に…

感動的な修学旅行であった。

初体験ダイビング？

富良野での体験学習…
北海道の旅

函館山から眺めた函館のまばゆいばかりの夜景。硫黄のにおいが立ちこめる登別の温泉。雪や寒風の歓迎を受けての富良野体験学習（雪のため、予定していた種目のうち、２つが実施できなかった）。それぞれの目的地に向かい、全員がきちんと時間を守った札幌の自主研修や小樽での散策。クラスを越えた259名が北海道の雄大な自然に親しんだ修学旅行であった。

きれいな水に感動

研究室紹介

工学部　電子工学科・久保（くぼ）研究室

私は、平成10年４月に、広島国際学院大学へ赴任してきた。その後学生と共にプラズマ発生装置の製作に取り組んできたが、その装置は現在順調に稼働している。

当研究室の主な研究対象は、プラズマの測定・解析である。作製したプラズマ発生装置は、１万分の１気圧程度のガスに電力を加えることで放電を発生させる、低電離プラズマ装置である。このプラズマは特に半導体産業で多用されており、現在各所で研究が進められているプラズマの１つである。

実際の研究内容は、プラズマ発生装置の作製の他、プラズマの状態を探るセンサーの作製、センサーからの電気信号を増幅するための電子回路作製、そしてこの回路から得られたデータをより正確かつ高速に処理するためのコンピュータプログラムの開発など、エレクトロニクスのほとんどの分野を総動員している。

さて、「プラズマ」とは何であろうか。一部ですっかりお馴染みになった言葉であるが、その正体を知っている人は案外少ないのではないであろうか。物理学の世界でプラズマと言えば、物質を構成する原子・分子が電子とイオンに分離して、程よくミックスされた状態を指す。我々の身近な例を挙げれば、炎の中や蛍光燈の中はプラズマ状態になっている。このプラズマ状態にある物質は工業的に大変有用で、照明、化学合成、そしてＬＳＩなどの半導体部品の製造技術に用いられている。また、環境問題の観点からプラズマを用いた有害物質の分解技術の開発も

プラズマ発生装置

プラズマ

現代社会学部　目黒（めぐろ）研究室

〈社会学の研究と実践の統一をめざして〉

福祉分野においては、理論と実践の統一が非常に重要であると考えている。障害者福祉の目標は、障害を持つ人が普通に生きられる社会を作る事である。障害に伴う不自由を補う色々なサポートシステムはもちろん必要であるが、それは社会のすべての人が「健康で文化的な生活」をおくれるように、社会が準備するべきものであり、少なくとも日本のように発達した先進国においては、十分実現可能な目標であろう。こういう社会は、障害者だけではなくすべての人が暮しやすい社会になり、高齢者も子供も豊かな暮らしをすることができる。

楽しいゼミ

人々に最も身近な社会は市町村である。国政が福祉制度や財政問題で大きな役割を果たしているのは当然であるが、国政を動かす力は、市町村に住む住民が持っている。従って、福祉の実践は市町村の中ではじまる。「社会福祉法人はなさきむら」（2003年開所予定）をフィールドとして、地域に根ざした事業活動を通じて、障害者が完全参加する町作りを研究したいと思っている。イギリスやアメリカ、スウェーデンなど他の国の進んだ政策や実践に学びながら、日本からも世界へ優れた実践を発信していくことができるであろう。この研究室から、熱意のある青年を社会へ送り出していけたらと願っている。

著書（イギリス・リーズ大学に提出したPhD論文）

レポート発表

大学院生が国際学会で頑張る

発表者
砂田智裕、中村格芳、平松孝俊

私達大学院生３名は指導教授と共に、７月23日～27日に香港市城大学で開催された第６回材料学会国際連合アジア会議に参加しました。

24日、25日の２日間にかけて、金属ナノクラスターの成長と純度（砂田）、単結晶シリコンの超精密切削加工における表面・内部クラックの評価（中村）、ナノインデンターによる純度アルミニウムの機械的特性（平松）のテーマでポスター発表をしました。会場では様々な国の人達でごった返し、各セクションは活発な討論がされました。当然話されている言葉はすべて英語、しかも皆さん流暢。私達は『大変なところに来た』という気持もありましたが負けてなるものかと、若さとジェスチャーで何とかポスターセッションを乗り切りました。３日目の夜には有名なJumbo Floating Restaurantで盛大なバンケットが行われ、中国や韓国の方々と懇談することができ、大変貴重な思い出となりました。

緊張した発表が終って

香港に来てみて、100万ドルの夜景の中に日本企業の名が多いことや、商店街の電化製品に日本製のものが多いことに気づき、日本の影響力の大きさに驚きました。日本に居ながら日本の技術力を実感する事は難しいことですが、今回の発表でこれを実感でき、非常によい経験をしたと思います。この国際学会において経験した事はこれからの研究生活に大きく影響すると思います。我々３人を指導してくださった先生方に感謝いたします。

発表会場

イギリスでデビュー作を出版　ミッチェル講師

人気の小説

本学のデイビット・ミッチェル講師が、本国のイギリスで昨年８月に小説「Ghostwritten」を出版したところ、普及版と合わせて５万冊の売れ行きにのぼり、好評を博している。その内容は平成12年７月24日（月）および８月22日（火）の中国新聞でも報じられた。広島に来てからの６年間の実体験を物語に投影したという本作品は、現在の日本のイメージを正しく伝え、イギリス人の日本理解に貢献しそうだ。来年３月には「number９dream」を発表する予定。現在は３作目の執筆にとりかかっている。

英語教師と小説家という２つの顔を持ち、多忙な毎日を送っているが、余裕があれば北海道に行ってみたいし、海でイルカと泳いでみたい、と言う。将来の目標は、絶えず向上心を持ち、学生に対してよりよい授業ができる教師になることだそうだ。また、学生の印象をたずねると、「熱心に授業に取り組む学生が多いですね。表面的な部分では分からない意外な個性を持っていて驚くこともありますよ」と笑顔で語ってくれた。

日本での経験をすべて盛りこみたいと言う